

遊戯折り紙研究考(3)

——遊戯折り紙の指導法について——

大森 隆子

Takako Ōmori

はじめに

前稿¹⁾において、筆者は幼稚園や保育所で扱われる折り紙の教育的価値について考察を行った。保育現場で折り紙の指導に携わった、もしくは助言者として関与した4氏(副島ハマ、待井和江、仲田安津子、川並知子)の見解を取り上げ、それぞれが抽出した価値の要素を項目化して整理したのである。結論を言えば、共通項目として挙げられたのは指先の運動神経を養う、図形の認識力、美的情操性、集中力、創造性の5つであった。特に創造性については、「創造性に乏しいという従来のイメージを払拭したい」という強い意識が4氏全員から看取できた。

その際に振り返った幼児教育の場での折り紙史を通して、わが国初の本格的な幼児教育施設といわれる東京女子師範学校附属幼稚園(明治9年開設)において、当初より保育内容に折り紙(畳紙・紙摺)が取り上げられていたこと、合わせて明治18年の同幼稚園の保育記録から、コムソウ・タカ・カブト・ノシ・雀・三方・美麗式・いぬ・二子船・箕・錦花・提燈・蟬・鶴・鳥・蛙・狐・連化花・菊皿・箱・船・チリトリ・足付三方など、今日では考えられないほど難解な作品が折られていた実情が明らかになった。なお折り紙の指導法としては、幼稚園運営の公的基準として制定された「幼稚園保育及設備規程」(明治32年)に記述されているように、当時の他の教材全般と同様、教師の作品を模倣して手本通りに折らせるものであった。

この指導法は、その後大正自由教育の潮流の中で子どもを型にはめる典型として批判を受け、さらに第二次大戦後は民主主義教育が標榜される中で、型通りに作成するだけの折り紙指導として徹底的に攻撃された。特に、戦前の小学校教科書(図画工作を中心に)には掲載され、指導もなされていた折り紙が、戦後は教科書から外されたという事実は大きい。こうした戦後の教育界の状況を、かこさとしは次のように語っている。

少々思慮の深くない進歩的教育論者が「型通り、順序通りに紙を折ってひっくり返させるだけのおり紙などに、何の価値があるものか、これこそ押しつけ・抑圧・創造否定そのものである」とかなんとか、勇ましく言ったり、これまた少々軽は

ずみで自主性のない親たちが、自分の持っているもの、伝えられたもの、よいと思うものを子に話したり、語ったり、伝えたりすることは、子どもをのびのびさせないことだと勘違いし、自分こそ物わりのよい、近代的な進歩的な親であると思われたいとあせるあまり、子どもにはやりたいことをやらせ、したくないことはしなくてもいいよという甘やかし放ったらかしの風潮のなかで、面倒なお紙遊びは消えてゆきました²⁾。

このように折り紙は創造性を封じ、子どもを型にはめ込む前近代的教育法の代表例とみられてきた。したがって、折り紙に有用性を認め、その教育と普及に情熱を注ぎ、振興役を担ってきた指導者たちは、この点を特に意識して創造性を価値の一つに掲げたことは前述の通りである。

本稿では、そうした者たちが実際の保育場面での折り紙指導において、どのような手法を示しているかを中心に検証したい。前稿で対象とした副島ハマ(1)、岡村康裕(2)、仲田安津子(3)、川並知子(4)の見解を取り上げる。なお、前稿では監修者である待井和江の名で取り上げた(2)は、本稿では指導法に特化する性質から、実践者・著者である岡村康裕の名に代えた。4者はいずれも実際の保育の場で、長年折り紙を実践してきた経験を持つ。各氏の意見集約と考察を通して、保育の場における折り紙の指導法について問題提起(まとめに代えて)ができればと思う。

1. 副島ハマの見解

副島は折り紙の指導法について、主著書『折り紙教本』の中で①折り紙の教育的価値と指導上の注意、②折り紙の指導法と利用法という2点から述べている。まず①については、氏が教育的価値として列挙した8項目(想像力、創造力・創作力、数学的・幾何学的概念、正確さ、物の順序性、作業の楽しさ・専念、美的情操性、手先の運動神経)³⁾に沿って指導上のポイントを示している。

最初に挙げた想像力の養成という項に関しては、次のように述べている。

元来、子供たちは、非常に想像力があって、大人の思いがけないものなどを連想するものでありますから、折り紙を適当に利用して想像力を伸ばすことは望ましいことであります。

そこで折り紙を指導する時には、昔から在る決まりきった折り方を、機械的に教え込むというやり方でなく、折る途中で「これ何か知ら？」などと、形から連想するものを表現させて、もし大変いい発表があれば、最初に目的としたものを途中でやめて、子供の発言したものとして完成させるように致しますと、子供たちの想像力は益々発達するのであります。

例えば、正方形の紙を二つに折ったものを、子供たちに「これ何でしょう」とお尋ね下さい。もし何時も先生方が、子供たちの想像力を伸ばすこと、と自由な発表を奨励して居られる幼稚園、保育所であれば、色々なことを連想して申すこ

とでしょう。曰く

絵本、ノート、封筒、(以下略)

さて、子供たちの中から「読み方の本のようにだ」という発言があれば、先生は「そう、そう、読み方の本そうですね。さあ皆さん一緒に読みましょう。

「おへやをかざる、みんなよいこ

きれいなおことば、みんなよいこ」

など、読本遊びに発展し、学校に対するあこがれを持つようにします。(以下略)

こうした指導をしますと、子供たちは折り紙から、色々な形を想像すると共に、物を見た時に物の形を大まかにつかむことが出来るようになって参ります⁴⁾。

ここに示された指導法は、定型作品の折り方を手順にしたがって教えていく、いわゆる折り紙の常道から外れ、折り紙という素材を用いた全く新しい指導法といえる。これは、“子どもの想像力を伸ばす”という教育的価値を第一に置いた氏の価値観が導いたものであろう。

二番目の創造力・創作力という項に関しては、先に挙げた想像力の項と関連付けながら、次のような持論を展開している。

折り紙では、創造力、創作力を養うことが出来ないものと思われている向もありますが、今申し述べましたような指導を致しますと、折り紙の指導の中にも、子供たちの創造力、創作力を養うことができます。

即ち、折った紙の形で、色々なものを想像することが上手になれば「もう少し、ここを折ればOOになるだろう。」とか、このはしを抜けて折り返せば、何か生まれて来ないか知ら？ おやこれはOOになった」などと、新しいものを創り出して行くようになるのであります⁵⁾。

このように、一枚の正方形が作り出す形の変化を子どもたちが想像力を働かせながら楽しんでいくならば、折り紙遊びは自ずから創作に通じることを確信しているのである。

三番目の数学的、幾何学的観念の項に関しても、「正方形」や「二等辺三角形」といった言葉を教えるのではなく、折る体験を重ねることによいという。四番目の正確さの項に関しては、「必ず紙を机の上か床の上に置いて折ることと、折った部分を最初左手で、押えて、右手ひとさし指とたかたか指の二本で押えつつしごき、次に右手で押えて、左手ひとさし指とたかたか指の二本で押えつつしごいて型をつけさせます⁶⁾」と、作法をきちんと教えることを説いている。五番目の物の順序性の項に関しては、

折り紙を指導なさる時に、子供たちに順序よく折り易いように教えて下さい。

大人なら一二ヶ所順序を抜かしても、正確に折れますが、子供たちを指導する時は、予め、余分な手間をかけて折り目をつけて置き、その折目に従って自然に正確に折れるように指導すれば、子供たちは楽しみながら、楽に折り紙が出来るのであります⁷⁾。

と述べ、指導者が丁寧な手をかけるよう求めている。さらに、自身の経験を通して子

どもが折り易い順序をルール化して提示した。指導者は必ず折り方の順番を会得しておくこと、また折目を付けておくことを課している。

次に、②の折り紙の指導法と利用法について検討してみる。副島は「折り紙の指導は、一斉保育でないと、出来ないと思っている先生方がいらっしゃるようでございますが、私は折り紙の指導は、初めから終りまで、一斉保育で指導することは不賛成です⁸⁾」と述べ、子どもの興味に基づく展開を主導している。まず、環境設定において興味を喚起させる工夫をし、折り紙を折りたくなつた子どもから作業を始めるようにする。出来上がった作品は皆に見せて鑑賞の機会を作ると、次第に多くの子どもが関心を持つようになる。

二三度こういうことが続いても、一寸も折り紙のグループに入らない子供たちのために、先生は特に折り紙と一緒に鑑賞したり、特に二三人の子供と折り紙を折ったりして、興味を持たせるようにして、今度は一斉に順序立った折り紙の折り方を指導します。そしてこの折り紙の一斉保育の間に、各自が工夫して折りたいたものを折ったり、ごっこ遊びで使うものなどを折ったりするという在り方が、理想的であるように思います。

尚、先生が新しいものを指導した時は、翌日の自由遊びの時か、又次の折り紙の時にでも、も一度折ることは、記憶を整理し、知識も明らかにするという点から望ましいことであり、又いうまでもなく、折りやすいものから、段々難しいものにと指導すべきであります。と同時に、他の保育内容との関連をよく考えて行わなければならないのです⁹⁾。

このように、自由な保育場面での活動を導入として生かし、あくまで子どもの興味に基づく展開をベースに一斉保育での折り紙指導を効果的なものにする、またこの活動が他の保育活動から遊離しないよう心を砕いている。利用法については、室内装飾・童話との組み合わせによる折り紙童話、あやつり人形の代わりなどの他、実物大に制作し自由遊び・劇遊び・行事の中で実用化するなど、子どもたちの遊びや生活の幅を広げ、楽しませることに資することとする。

2. 岡村康裕の見解

岡村は折り紙の指導法について、『おりがみあそび 130』の中で①折り紙の教育的効果と指導のあり方、②折り紙を折る時の心得の2点から述べている。まず①については、教育的価値として挙げた6項目（指先の感覚的運動・脳の発達、図形の認知力、集中力・持続力、創造性、情感の豊かさ、人間関係力の深まり）ごとに指導のポイントを示すとしているが、実際には教育的価値の紹介に終始している。あえて抽出すれば、図形の認知力を養成する方法として、「一度折った作品を広げてどんな線で構成されているかを見るのは、興味をそそるし、線と形の結びつきを理解する力をつけます¹⁰⁾」と、出来上がった作品を壊して線を確認するという一般には実施されていない

作業を助言している。創造性の養成については、他者の考えとは線引きし、次のような論を述べている。

「おりがみ」は模倣であって創造性がないと考えられてきました。果たしてそうでしょうか。書を習うとき、臨書が上達を早めるといいます。臨書には、形臨と意臨の2つがあります。まず「形」から入りこれを反復する意、つまり心がわかり、さらに進んで背臨の域に達するのです。お手本にとらわれず、自由自在の心の姿勢、自分の書がかけるのです。「おりがみ」の世界でも、まずすでに折られているものを折っていくうちに、折った人の心がわかり、さらに応用、創作の道へと進むのではないのでしょうか。模倣することは創作することの出発点だと思います。

そのためには、何よりも基礎折りをしっかり身につけることが大切です。基礎ができて初めて応用する力が育つのです¹¹⁾。

ここでは、基礎折りの習得が応用力の源泉であること、模倣が創作の基点であることなど指導法の論拠を示している。これは、指導者であるとともに、折り紙作家としても活躍している岡村ならではの実感から生ずる確信であろう。

情感を豊かにするの項については、「つくり放しは絶対さけましょう。そのままではいつか紙屑同然になってしまいます。少なくともおりがみ帳にはることを鉄則にしましょう¹²⁾」の他、壁面構成や室内装飾、遊びや生活の小道具になど活用法を提示し、様々な局面で折り紙を感じ、楽しむことを推奨している。また、人間関係が深まるの項については、年長児が年少児へ、老人が子どもたちへ、手ずから作り方を教える過程が人間同士の触れ合い作りに貢献すると述べている。指導に当たっては、指導者自身が「おりがみ」に熟達していることも要件に挙げている。

②の折り紙を折る時の10の心得¹³⁾の中からは、4点紹介しておきたい。1の「折る前に、まず、手を洗い、姿勢を正しくしてからはじめましょう」、4の「折るときは、決して急いだり、粗末な折り方にならないように1コマ、1コマゆっくり丁寧に折りましょう」、5の「折り目（折り筋線）は曲がらないように正しくつけ、折り目の上をそのつどつめの甲で軽くこすりましょう」、7の「折り方の順序は、図の①、②、③の順に従い、主に、山折り線、谷折り線に注意しましょう」というように、折り紙に向かう基本姿勢を一から押えている。

3. 仲田安津子の見解

仲田は『おりがみ全書』の中で、折り紙の指導法に触れている。この書は家庭の母親を対象としたもので、他の3氏と少し視座を違える。しかしながら仲田自身は保育者として現場で長く折り紙指導に携わってきたこと、その経験をここに生かしていることなどから検討対象としたい。指導法に関しては、①折り紙の材料と手作り折り紙の作り方、②親子で折り紙遊びをする時のコツの2点から述べている。

①の材料については、幅広く選ぶこととし、市販の色紙に拘らず、手作り折り紙、さらに「色紙、千代紙、和紙、模造紙、新聞紙、包装紙、ティッシュペーパー、ナプキン、布などがあります¹⁴⁾」と、多様な紙類に加えて布素材も紹介している。手作り折り紙の作成法としては、一般的に行なわれる長方形を三角に折って切り取る方法に加えて、「まず厚紙で正方形の台紙を作ります。台紙の長さはたてよこ12センチ、15センチ、18センチの3種類です。幼児の場合は12センチでじゅうぶんなときもあります。その台紙に合わせて、包装紙を正方形に切ると、簡単におりがみができます¹⁵⁾」という仕方を紹介している。

①の折り紙遊びのコツとしては、日常生活の場に常時折り紙を置き、目につきやすい設定をする。子どもが興味を示したところで親が折って見せ、それから一緒に楽しみながら折るようにする。子どもができないところは手伝うこと、作品を部屋に飾ると、大変喜ぶとしている。

仲田は、折り紙の教育的価値として、7項目（想像性、創作力、幾何的・数学的観念、物事の順序性、美的情操性、指先の運動機能、親子間の連帯）を挙げた。子どもの興味に沿って、楽しくということをポイントに、できないところは手伝うという分かりやすく、簡単な言葉での指導助言の背景に、こうした価値を念頭に置いていることも押える必要がある。

4. 川並知子の見解

川並は折り紙の指導法について、『折り紙あそび 資料と展開』の中で、①題材の選定、②指導の方法、③指導上の留意点の3点から述べている。まず①の題材の選定については、A 幼児の発達に即しているもの、B 保育目標に適合し、幼児の興味を引くもの、C 他の領域にも関連させて遊べるもの、D 保育者の指導力を考慮してとの4側面から述べている。Aの側面とは幼児の年齢、発達の度合い、折り紙経験などを考慮して、無理なく楽しい気持ちで折れるものを準備することが肝要とする。Bの側面とは、作品がよく理解でき、身近な題材やテレビ・幼児の間で話題になっているもの、幼児たちのイメージが広がりやすく、出来た作品で遊べるものということである。Cの側面とは、

うさぎと遊んだあとにうさぎを折り、うさぎの家づくりをしたり、絵本の読後に作ってペープサートにして会話をかわしたり、絵本づくり（創造話とか続き話づくり）をしたりすれば、幼児の表現意欲はいっそう満たされる。節分の三方は、折り紙で作れば「豆入れ」であるが、新聞紙で折ってかぶれば帽子になる。幼児は自分のからだにつけることを喜び、自発的に創り出す。自発的な行動は創意を生み出し、創造性や表現力を助長する¹⁶⁾。

と述べているように、折り紙を独立した遊びに留めず、保育全体の展開に関係づけていくことが大切だと主張している。Dの側面とは、子ども側の状況のみならず、保育

者側の力量・経験を測り、余裕を持って指導できる題材を選択することが楽しい保育に展開できる鍵であると言っている。

②の指導の方法については、「折り紙を与え、教えたとおりに模倣して作るという方法は好ましくない。幼児が自らの手で何かを作って表現するという喜びや楽しさがなければ、折り紙で遊ぶ意味がない。保育者は、幼児たちが楽しい雰囲気の中で、のびのびと遊べるような環境を用意すべきであろう¹⁷⁾」と述べているように、折り紙のいわゆる型通りの指導法を否定している。その代わり重視すべきこととして、〈準備〉、〈導入〉、〈折り紙の選択〉、〈分かりやすい言葉の使用〉、〈個人差の尊重〉、〈幼児の創意と工夫を認める〉、〈固定概念にとらわれない〉というポイントを強調している。

〈準備〉は念入りにすること、中でも「完成作品がどのように遊びに活用されてもいように、いろいろな補助材料を用意しておく。ボンド、のり、セロハンテープなどの接着剤やはさみ、ホチキスなどの用具は、身近な場所に設定しておく¹⁸⁾」といった環境設定の助言は、折った作品の自由な活用に創造性の発現をみようとしていると考えられる。〈導入〉は様々で、例えば、保育者の折った作品で遊ぶうちに作りたい気持ちを育てる、絵本の読後に登場人物や内容に関するものを保育者が折って見せる、作品を飾っておく、身に付ける、完成作品を見せて誘いかけるなど場面に応じた工夫を促している。

〈折り紙の選択〉については、色の選び方の助言はしつとも自由に選ばせることを基本とする。〈幼児の創意と工夫〉については、過程の努力も含めて必ず誉めること、作品は画一的になり易いので個々の創意を織り込むよう助言に努める。〈固定概念にとらわれない〉については、一つの基本形をマスターすると子どもは自発的に発展させる。どのように導くかは保育者の創意工夫力に託されれるとする。

③の指導上の留意点については、既成の色紙以外にも種々の紙を用意しておくこと、また、大きさや形の面でも違ったものを置くこと。指導の形態は一斉、グループ、個人など多面的に検討しておく。持続時間は5分から20分程度。保育者が技術をマスターし、心から楽しく余裕を持って臨むようにする。

川並は同時期に著した『子どもと作る折り紙遊び 第2集』においては、折り紙遊びの指導を広く紙遊びの領域に位置づけて提起している。その根底には、「折り紙は、単に折り方を示すばかりでなく、折ったものを保育のさまざまな場面に活用し、あそびがより豊かになるようにしましょう¹⁹⁾」との想いがある。紙をベースに道具や用品を駆使して、簡単な作業から複雑な作業に至る多様な作品例を提示しつつ指導の道標を示している。初歩の紙遊びは次第に複雑化し、芸術的な紙の造形にまで到達する。

他方で、教育的価値に挙げた5項目（集中力、巧緻性、形態認識、美的感覚・色彩感覚、子どもらしい活動意欲・喜び）のうち、特に初めの2項を考慮すると、正確な折り方の方法や順序性についても押えているものと考えられよう。

まとめに代えて

ここでは、4氏の見解をまとめてみたい。副島は、一枚の正方形が作り出す形の変化を想像力を持って楽しむことができるならば、折り紙を通して創造力を養成できるとする。同時に、折る時の作法や順序については、保育者が手をかけて正確な指導をすることを求めている。岡村は、創作の基は模倣であるとし、既成の作品の折り方を習得して初めて応用である創作ができるという。したがって、折る時の作法や折順についてはきちんと指導することを旨とする。仲田は、折り紙の材料を幅広く捉えることとし、手作り折り紙の作成方法にまで触れている。指導する者とされる者、すなわち親子間の関係の在り様を折り紙制作を通して示唆している。背景には、折り紙が内包する正確な手法の伝達が自然な形で継承されることを念頭に置いていると思われる。川並は、幼児自ら「表現する喜びや楽しさがなければ、折り紙で遊ぶ意味がない」とまで言い切り、折り紙遊びの指導の第一に創造性を位置づけている。それは折り紙という1枚の正方形に留まらず、多様な紙質・大きさや形・関与の手法を想定し、広く紙遊びの一種として捉え、あくまで創造性を追及し、種々の遊びとのコラボレーション、ひいては紙の造形作品にまで到達点を置くものである。しかしながら一方で、折り紙の価値として集中力、巧緻性の向上を挙げていることから、正確な作法や順序性にも留意すべきと押えていることが分かる。

以上、4氏の共通点としては、折り紙は昔から伝わる伝統的・文化的な遊びとして大人（保育者・親など）が子どもに正確に伝え・教えていくものであるという認識がある。他方、それだけでは折り紙の教育的価値は不十分で、折り紙を通して創造性を育てるという明確な教育目標も保持している。したがって、形を型通りに正しく伝えていくという発達段階にふさわしい指導法の開拓と同時に、どうしたら折り紙が子どもにとって創造的かつ自由に楽しい活動になるかについても、心を砕いていることが明らかになった。

その前提として、実践する保育者自身が折り紙に備わる価値として想像性、創造性、自由性を正確に認識すること、その地平に立てば自ずから創造的に指導法は構築されるということが明示された。材料の選択（様々な紙類・紙質・異素材など）において、環境構成（コーナー設定・個人配布・室内装飾・壁面構成・作品展示など）、また保育形態（一斉保育・コーナー保育・縦割り保育・個人的活動など）においてと、あらゆる視点から多面的に追求されていた。何より、保育者が興味を持ち習熟すること、次に折り紙の教育的価値を認識して子どもの育ちに位置づけ、教材研究を行うことが肝要である。指導法の出発点に子どもが興味を持つ工夫をすること、また折り紙だけの個別活動ではなく、他の遊びとの関連性や生活の中に生かすなど有機的繋がりを追求することも提示されていた。

しかしながら、今日の保育現場を省みると、このような価値観・教材観を持ち、そうした指導法に立つものは少数であり、現実には型通りの主導的折り紙が一般的であ

ろう。折り紙の教育的価値の検証に始まる折り紙教育、もしくは指導法の開拓が待たれる。今回の4氏の見解を手がかりとして、今後も保育場面における折り紙の指導法・活用法について考察を深めていきたい。

■注

- 1) 大森隆子「遊戯折り紙研究考(2)——遊戯折り紙の教育的価値について——」(『梶山女学園大学教育学部紀要 Vol. 3』所収) 2010 年、pp. 13~22。
- 2) かこさとし『日本の子どもの遊び(上)』青木書店、1972 年、pp. 74~75。
- 3) 前掲「遊戯折り紙研究考(2)——遊戯折り紙の教育的価値について——」p. 21。
- 4) 副島ハマ『折り紙教本』フレーベル館、1951 年、pp. A7~9。
- 5) 同上、pp. A9~10。
- 6) 同上、p. A10。
- 7) 同上、pp. A11~12。
- 8) 同上、p. A16。
- 9) 同上、pp. A17~18。
- 10) 待井和江監修 岡村康裕『おりがみあそび』チャイルド本社、1982 年、p. 9。
- 11) 同上、p. 9。
- 12) 同上、p. 10。
- 13) 同上、p. 15。
- 14) 仲田安津子監修『おりがみ全書』池田書店、1984 年、p. 35。
- 15) 同上。
- 16) 川並知子『折り紙あそび 資料と展開』チャイルド本社、1987 年、p. 14。
- 17) 同上。
- 18) 同上。
- 19) 川並知子『子どもと作る折り紙あそび第2集』チャイルド本社、1987 年、p. 8。